

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、浜松市長がサミット宣言を行った。また、豊橋市長が次回開催地域を代表してあいさつをした。

■「道」分科会

コーディネーター 浜松市長 鈴木康友

それでは、第1期のプロジェクトの検証等を踏まえて、第2期に向けてのそれぞれ皆さんの思い、視点ということでご意見をいただきました。

1つは、震災以降、道路に対する認識が大きく変化してきたのではないかと、言う点から意見が交わされました。3・11の震災以降、防災の面、地域の連携あるいは相互の協力等の面で「やはり道路というのは大事なんだ」という認識が、また芽生えているのではないかと。また、これまでは東西の道路が中心に整備されてきたのですが、沿岸と内陸を結ぶ南北の軸が大事だという、道路に対する意識が変わってきた。そういう点を我々も捉えて行かなくてはならないのではないかと、そういった意見が交わされました。

2点目として、単に道路の整備をしていくという要望ではなく、何故この道路が必要なのか、ということも改めて踏まえて要請していかねばいけない、という点から意見がありました。三遠南信道路が整備されると、防災の面、あるいは救急搬送等の時間が短縮されるので、命の道路として非常に大事ですし、観光や産業の面でも、交流が促進されます。

特に、この地域は三遠南信の連携をしているわけですから、その広域連携の骨格の道路であるということを再度認識して、今後、整備の訴えかけをしていく必要があるというご指摘もございました。

また、基調講演で講師の谷口さんにもご指摘をいただきましたが、単に地域にとって必要な道路というだけではなくて、国としてミッシングリンクを解消していく上で重要なんだ、という点を訴えかけていく必要があります。南北軸の道路というのは、国全体の道路網の中では、今まで忘れ去られていた部分でありますけれども、そうした国全体の中での三遠南信自動車道等の位置づけが必要であろうということです。

3点目として、道路が整備をされていくと、いい面ばかりではないぞ、という指摘もございました。例えば、中山間地域などは、道路がよくなって便利になると、どんどん人が都会に出ていってしまい、過疎化が進行して地域が寂れていく心配がある、という意見もありました。ですから、道路を整備すると同時に、住民の交流、あるいは観光における連携など、そうしたことへの配慮、広域連携の中での観光施策というものが重要だ、という認識がされました。この三遠南信地域は、単に道路をつくれという要望ではなくて、広域連携の中での道路の活用というものを考えているわけですので、その良さを生かして、インフラの整備と同時に、住民交流、地域交流というものを促進していかねばいけないというご指摘もございました。

最後に渥美半島の道路整備、あるいは浜松三ヶ日・豊橋道路といった、未着手の事業について、引き続き重要なプロジェクトとして取り組んでいくべきという要請もございました。

たくさんのご意見いただきましたことをご報告して、道分科会の報告とさせていただきます。

■「技」分科会 コーディネーター

株式会社サイエンス・クリエイト 中野氏

「技」分科会から、重点プロジェクトに対する評価・意見を報告させていただきます。

まず、浜松市の安形産業部長から「三遠南信発！産業イノベーション」について報告していただき、それを受けて、浜松商工会議所の御室会頭から、ビジネスマッチングフェアについて、出展が253点、約7,400名の参加があり、商談成立が28件、試作・見積もりが211件である、という報告がございました。同時に、合同人脈交流会を複数の商工会議所で開催し、会員同士の親交を進めているということでございます。

それから、豊橋商工会議所の吉川会頭からは、特に植物工場への取り組みについて報告いただきました。もともと豊橋というところは施設園芸100年の歴史を持っております。サイエンス・クリエイトも申請者の一員になっていますが、豊橋商工会議所も資金面でご協力をいただき、この7月に経産省の採択を受け、来年6月には植物工場研究棟が建ちます。この研究棟を活用して、新しい技術を磨きながら打って出る、という報告をいただきました。それから、海外展開の支援が今年から始まりまして、事例のノウハウであるとか、複数の商工会議所で広域的にグループを組んで対応していく必要があるという報告がございました。

豊川市の山脇市長からは、特に日本車両の新幹線、コニカミノルタのプラネタリウム、オーエスジーのタップ、そういった企業の持つ優れた技術を活かして、技術面で新しい展開をするという報告がございま

した。同時に、東三河5市が一緒になって、懇話会の事務局を置いて、企業誘致というのをずっと継続してやっている。御津臨海団地の整備をして、ここに企業誘致したいというご発言をいただきました。ただ、震災以後、防災への対応をしていかなければならない、ということでございます。

それから、新城商工会の本多会長から、浜松のやらまいか精神に学びたい、というご報告をいただきました。また、先進的な事例として、軽トラ市（のんほいロット）を開催しており、全国から非常に多くの視察が訪れているということでございます。また、東三河県庁という話がございまして、これに乗らない手はない、という報告がございました。

田原市商工会の山田会長から、田原というところは農業産出額が約730億円、半分が花でございしますが、こういう花、特に観葉植物が苦境に立っており、露地栽培に戻るのも出ているという報告がございました。それから、工業団地に東京製鐵が100ヘクタール進出したということですが、まだまだフル稼働にはなっていない。最近では、80ヘクタールで、メガソーラーを展開するというようなことが出ているということです。また、トヨタ自動車が一番大きい田原工場がございしますが、東北と九州の工場、3つの工場の競争になっているということです。国内競争に敗れますと、海外に出ざるを得ないということで、必死に頑張っている、という報告がございました。

磐田の伊藤会頭からは、ビジネスマッチングを継続しているということで、特に既存の企業の高齢化についてご発言がありました。

喬木村の大平村長からは、リニアの開通に期待しているということと、それから農業について、市田柿の生産は、昔は天日干しでしたけれども、今は機械で生産してい

るという報告がございました。

浅羽町商工会の大石会長からは、浅羽町は優良企業が継続していて、地域の産業が栄えたところでありますけれども、今までのやり方ではできない、次の展開にいきたいということと、マスクメロンの栽培が非常に盛んなところがございますが、これも継続的に新しいものにしていかない限りは生産が滞ってしまうという、そういう発表がございました。それからもう一つ、平均海拔が2.5メートルですので、高波等に関連して、立地の面で非常に障害を負った、その対策をしていかなければならないということがございます。

東三河市民連携委員会の原田委員長から、住民セッションの内容についてのご報告がありました。震災があったということもあり、山側と町側の関係で、町側は、もうちょっと山の方を活用して、上手な連携をしておいた方がいいのではないかという指摘がございました。

これら意見を踏まえて、「技」分科会では、2期目の展開に当たり、産学官から金融というところを加えた産学官金という枠組みは一層強化すべきだという点、それから、三遠南信地域大学シンポジウムが午前中ありましたが、大学がどういう形で参加していくかというところの見直しがあったという点、が重要になってくると思います。それから、これは補足になりますけれども、SENAは、内閣府の地域社会雇用創造事業を実施しています。トータルで7億、インキュベーション事業とインターンシップ事業2つの事業がございます。これは3月に終わりますが、このノウハウを次につなげていくということが大事じゃないかということでもあります。

私の感想としては、基調講演にあったように、変化にどう対応するかが重要で、変化から逃げない、ということにもとづいて

展開をしていく、ということだろうと思います。そこから、この三遠南信という枠組みの中で、大きな目標を持ったプロジェクトが起こっております。そこに、それぞれの市町村がどういう形で加わりながら全体に連携、あるいは融合していくかというところが今後の進歩につながるのではないかと、思っております。以上で報告を終わります。

■「風土」分科会 コーディネーター

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

風土分科会の内容をご紹介したいと思います。塩の道エコミュージアム構想をどのように進めていくかということをめぐり、3つのパートから検討をいたしました。

最初に、三遠南信アミの中野理事から報告をいただきました。地域資源を生かして、地域と人を元気にする取り組みということで、アミが取り組んでおられるさまざまな方策についてご紹介をいただきました。

続いて、第1期の重点プロジェクトについて、評価を行いました。そして最後に、第2期をどのように考えていくか、という点について話し合いました。

第1期の評価では、特にお祭りとか、それから地域の食材等のことについて話題が続きました。地域でとれる昔からの野菜、地域の振興、コミュニティのつながりを束ねていくお祭り、こういったものを観光とリンクさせるのが難しい、という話が相次ぎました。横山町長からは、ある場所では、たくさんのイベントを集めた結果、そのキャパが対応し切れなくて、大変困ったというようなお話がございました。しかし、湖西市長からは「失敗、いいじゃないか。どんどんチャレンジしてやってみたらいいじゃないか」というご意見がございました。

飯田市は、たくさんのお祭りを集めたイ

ベント、海外発信などもやっていらっやいます。そういった観点からお答えがございました。それから、特に中山間地の中には、地域に伝わってきた学びの資源があるのではないかというご指摘もいただきました。

第1期の評価を受けまして、第2期に向けてどのように考えていくかということについて話題が進みました。

まとめますと、地域社会は、少子高齢化の中でも、人が地域に入ってきてくる仕掛けをいっぱいつくっていくべきだ、という意見がありました。NPO法人てほへの大脇さんからは、和太鼓のプロの方々が地域社会に入って感じたことを発表していただきました。高齢者が増えて、限界集落化して、お祭りもできなくなってくる中で、一つのヒントを与えてくださったわけがございます。人材バンクをどのように地域の中につくっていくか。そして、お祭りを伝えること、それを通じて、学びを生かし、その地域で生じるエネルギーをどのように生かしていくかということが議論されました。

そのようなことを行政、経済界あるいは住民の皆様あるいはNPO・NGOの団体、そういったさまざまなセクターが、どんどんと自主的に進めていくことが大事じゃないかということなのです。

湖西市の三上市長から、「各論はともかく、実際何かやろう。1つくらい決めたらどうだ」という話が出まして、実際に地域のお祭りを見に行こうじゃないかという話が出まして、随分と景気がついたところでございます。実際には、招待状をいただかないと行けないよというような話もございますが、事務方の皆様、あるいは住民の皆様にもお願いをしまして、民間は民間で、あるいは経済は経済の皆様で、あるいは行政の皆様は行政の皆様で、それは、ごちゃ混ぜにして、企画されたいんじゃないか。そういうことを議決できるように、第

2期に向けて、具体的な展開をしようということで、合意をして閉幕となりました。

以上、風土分科会の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

■「山・住」分科会

コーディネーター

豊橋技術科学大学 大貝教授

山・住分科会の報告をいたします。

この分科会は、山は「中山間地を活かす流域モデルの形成」、住は「広域連携による安全・安心な地域の形成」という、三遠南信地域の暮らしの問題を取り上げている分科会かと思えます。

まず、浜松市の松永危機管理課長より、「東日本大震災から学ぶこと」、三遠南信地域における防災連携のあり方ということでご報告をいただきました。

その後で、重点プロジェクトとしては5つのプロジェクト、それぞれについてご意見をいただきました。

まず第1期のプロジェクトの評価ということで、ご意見をいただきました。

中部圏の広域地方計画のリーディングプロジェクトとして、この三遠南信地域のビジョンのプロジェクトが位置づけられたということ、各地域で中山間地域と都市部の連携した事業等が進められてきたこと、その点は高く評価されるわけですがけれども、やはりまだまだ取り組みとしては不十分であろうということが全体の認識だったかな、と思えます。

とりわけ水問題については、どこの流域においても、いわゆる上下流問題について、まだまだ不十分ではないかということでもあります。この問題は行政だけで解決できるような問題ではなく、今後も、行政の枠を超えて、具体的な取り組みが必要ではないかという意見がありました。例えば、東三河では豊川水源基金というのがありますが、

これを活用できないかという意見、そういった取り組みをこの地域に広げていってはどうか、という意見がございました。

天竜川、その他水系における土砂管理の問題についても、ダム問題含めて、まだまだ具体的な取り組みとしては不十分なのではないか、という意見がございました。この土砂管理の問題というのは防災の問題ともつながっており、今後ますます重要な話になってくると思われまます。

そういった中、市民代表の方からは、中山間地域の人というのは、非常に生き生き生活をしている。地域のコミュニティの力というのが、都市部に比べて非常に高い、というご発言もありました。

また、浜松市の市民協働センターの中山間地域の振興の取り組みが報告されまして、その中で、都市部の人には、三遠南信という言葉聞いたことすらないという人がいるということですね。ですので、やはり浜松市としても、天竜区、さらにその北に目を向ける人材育成する必要があるのではないかというご意見をいただきました。

第1期のプロジェクトを振り返り、これから何に重点を置いていけばいいのかという点についてですが、最初に出た水問題というのは、まさにこの地域の暮らしの問題でもあるということでもあります。山での暮らしをいかに維持・確保していくか。これは、イコール雇用の場をどう創造していくかということになるかと思えます。そういった面から見て、まだまだこのビジョンによる取り組みというのは不十分ではないか、というご意見をいただきました。

一方で、三遠南信地域の中には、小さいながらも、非常にユニークでオリジナリティあふれる取り組みが多くある、という報告もされました。

したがって、そういった一つ一つの成功体験を、この地域でもっと共有してい

くということが重要ではないか、という指摘がありました。きめ細かく地域の情報を共有していくことが、これから重点を置いて取り組むべきテーマではないかということでもあります。

そしてもう一つ、人を育てる仕組みというものが、まだまだこれから必要であろうということでもあります。

この点に関しては、SENAでは、2年間、地域社会雇用創造事業としてインターンシップ事業に取り組んでおり、既に900人を超える受講生がいるということでもあります。そのインターンシップの受講生、受講生を受け入れる側の地域、個別に今まで活動をしていたNPOやボランティア団体等が、このインターンシップ事業を通じて横に繋がり、それぞれの地域でネットワークが生まれていることは、非常に重要ではないかと思えます。これは私の意見ですが、人を育てるという意味で、このインターンシップ事業も、今後SENAの中で何らかの形で継続していけるように検討をお願いできないかな、と思えます。

それともう一つは、浜松市が今実践しています市民協働センターでの取り組み、地域に入って行って、地域の人と一緒に都市と上下流の連携の活動を進めていく。こういった活動、これは行政だけではできない話ですので、民も一緒になって取り組む、草の根的な活動を、三遠南信全体にSENAも何らかの形で関わって拡大していければいいのではないか、と思いました。

以上です。どうもありがとうございました。

■ サミット宣言 浜松市長 鈴木康友

第 19 回三遠南信サミット in 遠州では、「三遠南信流域都市圏構築への挑戦～融合、新たなステージへ～」をテーマとし、全体会および各分科会において、三遠南信地域連携ビジョンの重点プロジェクトについて、これまでの検証・評価及び 24 年度以降の事業推進の方向性を議論しました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、新たなステージに向け、本日のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、県境地域連携を自負と責任を持って推進します。

- 1 三遠南信自動車道について、早期全線開通のためには現道活用区間の整備などミッシングリンクを解消すること、また、災害時には、内陸部と沿岸部を結ぶ「命をつなぐ道路」として欠かせないものであるという認識を確認しました。
圏域の一体的な発展のため、三遠南信自動車道の早期全線開通、リニア中央新幹線の早期開業、浜松三ヶ日・豊橋道路の整備、三遠伊勢連絡道路の実現を目指し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心とし、地域一体となった提言活動等を進めます。
- 2 地域の産業基盤を活かした国際優位性のある新産業の創出と、既存産業の振興を実現するため、「三遠南信地域基本計画」及び「地域イノベーション戦略推進地域」等、産学官金等の各主体が県境を越えて連携し、国際競争に勝ち抜くための戦略を推進します。
また、三遠南信地域内の大学連携の方向性について、引き続き検討していきます。
- 3 三遠南信地域における歴史、自然、文化、そして人々の上下流域の結びつきを再確認し、「塩の道エコミュージアム」を構成する地域資源を活用した事業に取り組む民間団体との連携を強化するとともに、圏域内外への発信体制の整備を進めます。
- 4 地震や台風等により、広域的また局地的に発生する災害に対応するため、県境を越えた防災体制の整備について、現実的な相互協力に取り組みます。各自治体における防災力を検証したうえで、三遠南信災害時相互応援協定を見直します。
また、中山間地域を活かす流域モデルの形成に向け、各地域が取り組む定住促進施策の連携について検討するとともに、情報発信に関わる体制の整備を進めます。
- 5 三遠南信地域連携ビジョン推進会議の後継となる新・連携組織は、現在と同様に地方公共団体と経済団体との官民連携の組織とし、今後の広域連合設置に向けては、専門委員会において検討を進めます。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、第 19 回三遠南信サミット 2011 in 遠州のサミット宣言といたします。

平成 23 年 10 月 24 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット 2011 in 遠州

○次回開催地域あいさつ

豊橋市長 佐原光一

皆様、お疲れさまでした。

さまざまな分野の方たちがたくさん参加され、この「三遠南信サミット2011 in遠州」が滞りなく、そして成功裏に終わりましたこと、まずもってお祝い申し上げたく思います。

そして、来年、開催予定地の東三河を代表して、一言ごあいさつを述べさせていただきます。

その前に、この会の準備のため、遠州地域の方たちが、たくさんかかわって準備していただき、また会の運営に、大変なご尽力をいただきましたことに、御礼を申し上げます。

先ほどのサミット宣言で出ましたように、いよいよ広域連合という具体的な目標に向かって歩を進める段階になり、その第一歩の発表の場所として、来年度の三遠南信サミットがある、そんな大事なサミットであると思います。

また、いよいよ20回という節目の会を迎えることにもなります。大変荷の重い1年だなと思いますが、また、一方で大変夢のある、素晴らしい1年になるものだなというふうに思っているところでございます。

偶然と言ってはなんですが、東三河の海外への窓口であります三河港、来年がちょうど50周年という節目の年にもなります。

今後、私たち三遠南信地域が、国内だけでなく、海外に向かって活躍をする、そんな提案も今回の分科会のあちらこちらでされておったかと思えます。そういう意味では、東三河で開かせていただけることが、大変素晴らしいタイミングになるなと思っております。あわせて、東三河ではちょうど東三河県庁の開設作業も進んでおります。来年度は、その鼓動が脈打ち始める、そんな年にもなります。

東三河の力をあわせて、皆様方を精いっぱいのお力でお迎えし、素晴らしい会にしていきたいと、これから準備をさせていただきたいと思えます。

来年も、今年以上に多くの方たちに東三河にお集まりいただき、三遠南信の未来に向かって、新しい歴史を刻んでいきたいと思えますので、どうぞよろしくお願いをいたします。ありがとうございました。

